

看護学生の観察力の変化に関する研究

－プロセスレコードに記載された患者の非言語的表現の分析－

Study of change student nurse's powers of observation

－ Analysis of patient's nonverbal expressions written to the process record －

秋庭 由佳 藤澤 珠織 松島 正起 古橋 洋子

Yuka AKIBA Shiori FUJISAWA Masaki MATSUSHIMA Yoko FURUHASHI

青森中央短期大学 看護学科

Aomori Chuo Junior College, Department of Nursing

Key words : 観察力, 看護学生, プロセスレコード

I. はじめに

基礎看護学は、学生が入学後始めて学習する専門教育科目である。本学では入学後1年間で基礎看護学の授業と実習が展開される。基礎看護学実習は、1年次の5月から老人福祉施設において対象者の生活環境と関わり方を学ぶために月1回のペースで3回実施される。また、11月末には、受け持ち患者の看護過程の展開を学ぶために2週間の病院実習が展開される。國眼¹⁾が、「今の若者の特徴として、見知っている人との関係のあり方は学んできているが、見知らぬ人との関係のあり方を学んできていない」と指摘しているように、入学当初の学生は初対面の人、特に年齢の異なる人とのコミュニケーションの取り方や関係の築き方に困難を感じている様子がうかがえた。学生に限らず、現在はプライバシーや個人情報保護の重視などの社会風潮や核家族化などに伴い、見知らぬ人や物に無関心を装う傾向が高まっていると言える。

そこで、2013年度より実習の初期のうちから、学生が自己の関わり方を振り返るためにプロセスレコードを記載することを義務付けた。プロセスレコードは、場面を再構成することを通して、「患者と看護者の相互作用過程を明らかにし、実践に役立たせるために活用されている記録」²⁾である。この再構成とは「体験されたことを言語化すること」で、「自分自身の行動と感情を振り返り、熟考すること」²⁾が目的とされている。場面を再構成するための記載枠組みには種々あるが、「患者の言動、看護者が考えたり感じたりしたこと、看護者の言動」²⁾の3要素が含まれる。プロセスレコードに再現された場面は、記載した看護者自身の主観によってとらえられたものである。すなわち、看護者が人との関わりの中で何を読み取ったかが、その記載内容から見えてくる。患者の言動としては、非言語的に表現されるものと、言語的に表現されるものがあり、看護者の五感を用いて感じ取った表現が記載される。これまで、初期の看護学生は、患者と十分な時間をとって話をしている、後に話をし

ている際の患者の反応を尋ねると答えられないことが多々あった。また、学生が記載したプロセスレコードの中にも、患者と話した言語的記載はあるものの、声のトーンや表情、動作・姿勢などの非言語的表現は少ない傾向にあった。学生には漠然と目に見えていても、見えているものが意味ある情報として認識できていないことが推察された。

観察力は事物の現象を自然の状態のまま客観的に見る力³⁾であり、「コミュニケーション能力の中心的な力とされ、好奇心や関心が観察力や洞察力向上の鍵」⁴⁾とされている。また、ナイチンゲール⁵⁾は、「看護師に課す授業の中で、もっとも重要でまた実際に役に立つものは、何を観察するか、どのように観察するか、どのような症状が病状の改善を示し、どのような症状が悪化を示すか、どれが重要でどれが重要でないのか、どれが看護上の不注意の証拠であるか、それはどんな種類の不注意による症状であるか、を教えることである」と述べ、看護師には正確にしてすばやい観察の必要性を強調している。すなわち、看護師にとって観察力は患者との人間関係を構築するためにも、専門的に患者の心身を理解するためにも重要な能力といえる。

このように、ナイチンゲールの時代から観察力の重要性は謳われているものの、看護学生がどのように観察力を身につけていくのか、変化していくのか等に関する先行研究は見当たらなかった。そこで、看護学生が初対面の相手と関わる際に、なにが見えているのか、そしてそれは経過を追うごとにどのように変化していくのかを、1年次に行われる基礎看護学実習のプロセスレコードから明らかにしたいと考えた。プロセスレコードに記載された患者の言動は、学生が患者との関わりにおいて五感で感じ取った事柄である。これに記載された言葉以外の非言語的表現について、経過を追って分析することで、看護を学び始めた学生の観察力の実態とその変化を知ることにつながると考える。また、1年次の看護学生の観察力が変化する過程を知ることは、より効果的に観察力を育成するための基礎資料になり得ると考える。

II. 研究目的

本研究は、看護学生が1年次の基礎看護学実習で記載した3回分のプロセスレコードを用いて、対象者の非言語的表現を経過を追って分析することで、看護を学び始めた学生の観察力の実態とその変化を明らかにすることを目的とする。

III. 方法

1. 研究対象

A短期大学看護学科1年生85名中、研究に同意した30名(35.3%)を対象に、基礎看護学実習で記載した3回分のプロセスレコードを分析対象とした。1回目のプロセスレコードは、5～6月に行われた高齢者施設での初めての实習時に記載している。2回目は、10月に行われた高齢者施設での3回目の実習時に記載している。3回目は、11月末～12月にかけて行われた2週間の病院実習時に記載している。

2. 研究方法

- 1) 1～3回目のプロセスレコード記載内容のうち、患者(対象者)の言動、看護者が考えたり感じたりしたこと、看護者の言動に分けてパソコンに入力した。

- 2) 1回目のプロセスレコードについて、患者（対象者）の言動のうち非言語的表現を抽出した。
- 3) 非言語的表現が何を示しているか内容の同質性・異質性により整理し、集合体を形成した。1回目のプロセスレコードの傾向をまとめた。
- 4) 2回目、3回目のプロセスレコードについても、2) 3)と同様にしてそれぞれの回の傾向をまとめた。
- 5) 1～3回目のプロセスレコードの分析結果を表にまとめた。
- 6) 分析結果の妥当性について、質的研究の経験が豊富な共同研究者と検討を繰り返した。

3. 対象者への倫理的配慮（対象者の権利、個人情報保護等について）

青森中央短期大学研究活動推進委員会の許可を得て実施した。

対象学生に対しては、本研究の目的と内容、自由意思による参加、拒否や途中中断する権利、研究参加の可否が成績評価に影響しないこと、プライバシーの保護を保障することを口頭と文書をもって説明した。研究の了解に関しては、文書の提出をもって同意とした。プロセスレコードの内容については、個人情報の保護・匿名性を保持し、データは、研究者が厳重に保管、データ処理が終了次第シュレッダーで処理する。また、本研究で使用したデータは、研究以外の目的には使用しない。

IV. 結果

基礎看護学実習で記載した3回分のプロセスレコードを分析した結果、患者（対象者）の言動のうち非言語的表現は、1回目145記録単位、2回目150記録単位、3回目131記録単位で、計426記録単位抽出された。（表1、図1）

表1 プロセスレコードの非言語的表現の変化

	1回目		2回目		3回目		計	
	記録単位	%	記録単位	%	記録単位	%	記録単位	%
無言	26	17.9%	45	30.0%	23	17.6%	94	22.1%
視線	32	22.1%	18	12.0%	19	14.5%	69	16.2%
表情	42	29.0%	18	12.0%	8	6.1%	68	16.0%
頭の動き	18	12.4%	27	18.0%	14	10.7%	59	13.8%
動作	11	7.6%	15	10.0%	28	21.4%	54	12.7%
手の動き	12	8.3%	9	6.0%	3	2.3%	24	5.6%
口調、声	4	2.8%	3	2.0%	6	4.6%	13	3.1%
目			2	1.3%	18	13.7%	20	4.7%
口・舌の動き			10	6.7%	6	4.6%	16	3.8%
眉間			3	2.0%	6	4.6%	9	2.1%
	145		150		131		426	

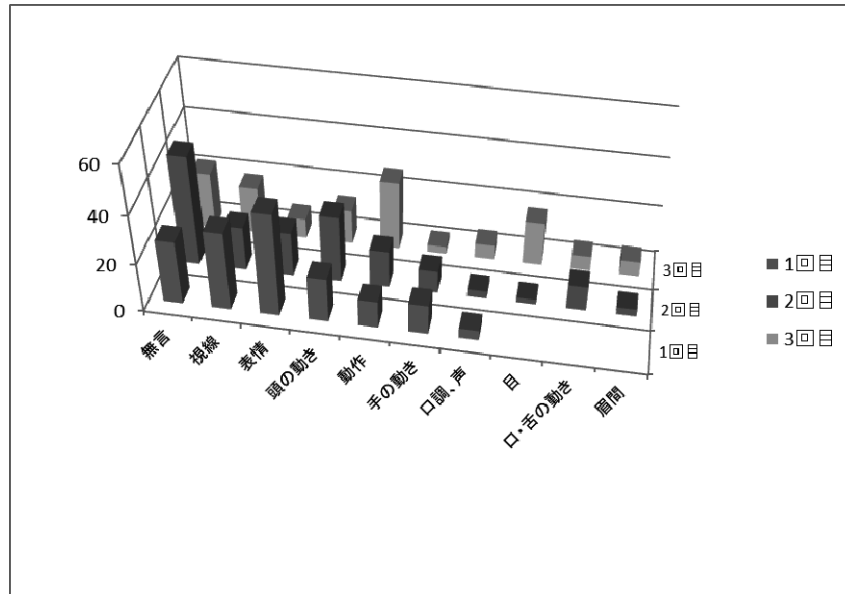


図1 1～3回目の非言語的表現の変化

1. 非言語的表現の全体概要

全体を通して最も多く抽出された非言語的表現は、【無言】で94記録単位（22.1%）、次いで【視線】69記録単位（16.2%）、【表情】68記録単位（16.0%）、【頭の動き】59記録単位（13.8%）、【動作】54記録単位（12.7%）の順であった。

【無言】には、「…」や「無言で」「黙ってしまった」などが含まれ、1～3回目のどの回においても記載が多く、特に2回目に最も多く記載されていた。【視線】では、「天井を見つめている」「私の方を見ている」「窓の方を見て」などが含まれ、1回目で最も多く記載されていた。【表情】では、「笑顔で答える」「困った表情」「顔をしかめている」などが含まれ、1回目で最も多く記載されていた。【頭の動き】では、「うなずいている」「首を振っている」「下を向く」「首をかしげる」などが含まれ、2回目に最も多く記載されていた。【動作】では、「私の手を握った」「足を動かしている」「腰を上げる」などが含まれ、3回目に最も多く記載されていた。

2. 1回目～3回目に記載された非言語的表現の変化

1回目のプロセスレコード、つまり初めての高齢者施設における実習では、非言語的表現が7項目抽出され、【表情】に関する記載が42記録単位（29.0%）と最も多く、次いで【視線】32記録単位（22.1%）、【無言】26記録単位（17.9%）であった。

2回目のプロセスレコードでは、「目を閉じて」を含む【目】や「口を動かしている」「吸い込んだり舌を前に突き出した」を含む【口・舌の動き】、「眉間にしわをよせて」を含む【眉間】に関する非言語的表現が増え、10項目抽出された。記録数では、【無言】に関する記載が45記録単位（30.0%）と最も多く、次いで【頭の動き】27記録単位（18.0%）、【視線】と【表情】がそれぞれ18記録単位（12.0%）であった。

3回目のプロセスレコードでは、2回目と同様の10項目の非言語的表現が抽出された。記録数で

は、【動作】が28記録単位（21.4%）と最も多く、次いで【無言】が23記録単位（17.6%）、【視線】が19記録単位（14.5%）であった。

1回目から3回目のプロセスレコードを通して、全体の上位5項目である【無言】、【視線】、【表情】、【頭の動き】、【動作】の他に【手の動き】、【口調】の2項目が抽出された。【手の動き】には、「握っていた両手を頬に当て」「天井を指示」「皿に手を伸ばして」「手で払いのけようとする」などが含まれる。【口調】には、「あたたかく言ってくれた」「つらそうに言う」「はっきり大きな声」などが含まれる。これらのうち、【表情】と【手の動き】に関しては回を追う毎に記録単位数が減少した。逆に、【動作】に関しては回を追う毎に記録単位数は増加している。

2回目以降のプロセスレコードから抽出された項目は、【目】や【口・舌の動き】、【眉間】に関する記述で、このうち【目】や【眉間】に関する記述は回を追う毎に増加している。

V. 考察

1. プロセスレコードからみる非言語的表現の傾向

【無言】は、プロセスレコードに記載された非言語的表現の中で22.1%と最も多く記載され、回数を重ねても減少する傾向が見られず、看護学生1年次における対人関係では、無言あるいは沈黙が最も気がかりなことが伺えた。

奈良⁶⁾は、初期段階の看護学生の臨地実習におけるコミュニケーションに関して、沈黙への対応は、コミュニケーション技術の中でも「学生が最も難しさを感じている技術である」と述べている。臨地実習では、様々な年代・疾病や背景を持つ人々と関わっていく。一般的にも、沈黙が続くと気まずく、いたたまれない気持ちになるが、学生は実際の患者（対象者）を前にして、年齢の異なる相手に合わせた話題づくりが未熟なため、沈黙が繰り返される状況に至る。近年の若者同様に「看護学生の基本的な生活能力や常識、学力が変化してきていると同時に、コミュニケーション能力が不足している傾向」⁷⁾が指摘されている。その背景には、核家族化や少子化、地域交流の希薄化等があげられるが、携帯電話やパソコンなどの情報機器の普及により、対面して直接情報を得る機会が減っていることも若者の人との関わりに影響を与える一つとされる^{8) 9)}。國眼は¹⁰⁾、今の若者は、「携帯電話そのものが、友人づくりのきっかけや友人関係や知り合いとの関係を維持する上で、必須のアイテム」となり、「人と繋がっていることを確認できないと不安」になったり、「メールの返事が来なかったり遅れたりすると自分の存在を否定されたかのように感じる」と述べている。また、「携帯電話は相手と絶えず繋がることができる」が、「対面コミュニケーションのように相手の表情やしぐさが見えない」ため、そこから「相手の心情を推し測ることが難しく、どうしても相手から届いた音声や文字という情報のみを重要視することになる」と指摘している。このように、現代の若者は、常に他者とつながるツールがあるがゆえにそれに縛られ、相手からの反応がないことに対しては必要以上に動揺したり、言葉がなければ相手の思いや反応は何もないと理解する傾向が強いと思われる。

高齢者施設における実習では、学生は相手の情報を知らずに関わりを持っている。そのため、学生は、なんとか話をし続けようと話題作りに焦り、その焦りがさらに相手の反応を捉えにくくし、次々話題を変える状況を呈する。平野は¹¹⁾沈黙がおこる状況には、「話が一段落した場面、何か話したくても言葉が見つからない、話の相手に抵抗感を持っているようなとき、自分をこれ以上掘り下げたく

ないなど、さまざまな場合がある」ことを指摘している。このようなとき、「話の接ぎ穂として沈黙の前の言葉を繰り返すことによって会話が新たに動き出すようになる」と述べている。高齢者施設には、聴覚や認知機能が低下している方も多い。したがって、相手の身体的な特徴や状態を捉えながら関わることや、話が途切れて沈黙するような状況が現れた時には、沈黙の意味を考え、沈黙に入る前の言葉に戻ってみるなどの対応が必要である。人との関わり方は、一足飛びに身につくものではない。学生自身が自己の関わりの傾向について、折に触れて振り返ることも重要である。さらに、学生のコミュニケーション能力を向上させるには、段階的な教育内容や教育方法の構築も今後の課題である。

プロセスレコードの非言語的表現のうち、【無言】に次いで多いのは、【視線】、【表情】、【頭の動き】の順で、これらを合わせると196記録単位で全体の46.0%を占めた。学生は人と接する際に、体幹や手の動きよりも顔面、頭部を見ている。柿木¹²⁾は、「意識されない視覚情報（サブリミナル刺激）」の中に顔が隠されている場合の脳の反応について、たとえ意識には上らないような短時間な画像を見た場合でも、顔に対しては脳が非常に鋭敏に反応することを指摘している。そのことから、人にとって、相手の情報を素早く認識し、そこからさまざまな情報を得ることが、生きるために不可欠な能力である」と述べている。「顔には20以上の表情筋があり、それらを用いて意図的に表出できる表情は60種類以上¹³⁾あり、表情は、「その人の心的状態を表す視覚情報であると同時に、他者に向かって発信された一種のメッセージ¹⁴⁾と言われる。学生は、相手の表情や視線の先を見て、相手の心的状態やメッセージを読み取ろうとしていることが伺える。また、顔の動きには、口をすぼめる、眉間にしわを寄せるなどの非剛体的な動きと、首をかしげる、うなづくなどの剛体的な動きがあり¹⁵⁾、学生は、表情とあわせて顔（頭）の動きにも着目していた。トラベルビー¹⁶⁾は、「メッセージを正確に伝えたいと思えば、お互いに相手を理解したい、相手に理解してもらいたいという願望を強く持つ必要がある」と述べている。相手を理解するために、学生が見ていた表情や顔（頭）の動きは、情報収集の窓口としての割合がとても大きいことが言える。人との関わりは双方向のものである。相手が無言または反応がない場合には、学生自らの表情や顔の動きがどうであるかについて振り返ることも必要である。今回、学生が関わりを持った対象者の多くは高齢者であり、高齢者の表情表出の強度は弱いことや高齢者の表情は顔のしわなどの構造的な変化のために若い人の表情に比べて読み取りにくいことが指摘されている¹⁷⁾。初期の臨地実習で、言語的にも非言語的にも表現の読み取りが難しい対象者と関わることは、学生にとっては大変困難な状況と推察する。しかし、高齢社会にあって、患者の多くは高齢者である。対象者の心情や思考等の情報が表出される顔を細かく観察できることが、円滑なコミュニケーションにつながるものであり、教育的支援について今後も検討が必要である。

2. プロセスレコードからみる非言語的表現の変化

表情に関しては、1回目のプロセスレコードには最も多く記載されたが、回を増すごとに記録数が減少している。しかし、2回目以降のプロセスレコードからは、口や目・眉間の動きが記載され、顔をより細かくみている様子が伺えた。光戸ら¹⁸⁾は、「表情認知過程においては、表出者の顔の物理的特徴の中でも特に目や口といった部位からの情報を利用している」と言われ、中でも「目からの情報をもっともよく用いており、そのことによって表情を正しく認知できる」と述べている。実習の後

に記録を書く際、表情など全体的なイメージではなく、部分的な動きを記入できるということは、学生はその部位を意識してみる、または意図してみていたことが推察される。1回目のプロセスレコードは5～6月に、3回目のプロセスレコードは11月末～12月に記載されている。この間に、学生は様々な知識と技術、そして実習を重ねることによって、細かく観察する力が向上したことが示唆された。

回を増すごとに記録数が増加しているものの一つに、動作がある。5月から11月と実習が経過する中で、学生ができる援助も多くなり、援助場面でのかかわりが増え、その時に振り返るがゆえに動作に関する記載が増えていると思われる。高木¹³⁾は、姿勢や身体動作にも多くのコミュニケーション的情報が含まれることを示唆している。学生は援助をしながらも、相手の動作に着目し、広く情報を得ようとしていることが伺えた。今後一層知識が増え観察視点が増えることや臨地実習で様々な患者への看護を通して、非言語的表現の記載内容が多岐にわたることが期待され、継続して検討していくことも教育的に必要である。

VI. 結論

プロセスレコードに記載された非言語的表現の中で、【視線】、【表情】、【頭の動き】はあわせて196記録単位（全記録単位の46.0%）を占め、学生は相手の表情や視線の先を見て、心的状態やメッセージを読み取ろうとしていることが伺え、表情や顔（頭）の動きを情報収集の窓口として認識していた。

非言語的表現を経過を追ってみると、学生は初め、患者の表情など顔全体を捉えているが、徐々に目・口・眉間などをより細かく見ている。一方、動作に関する記載も増え、学生の注視する先が顔以外にも広がっていることが伺えた。これらのことから、学生は学習が進み実習を経験する毎に、顔に関してより細かく、注視する視野は広がっていくことが示唆された。

おわりに

本研究では、実習の後で学生が患者（対象者）との関わりを振り返ったプロセスレコードから患者（対象者）の非言語的表現を分析している。したがって、記載した学生自身の主観によって場面が再構成されており、実際の学生の関わりや観察内容との整合性は検討していない。実際に臨地実習の場で一人一人の学生の視線の動きを測定することは不可能であり、プロセスレコードの記載内容と実際の場面の整合性を検証できないことに研究の限界がある。

文献

- 1) 國眼真理子：いまどきの若者の考え方・育て方、第2版、182、日総研、2005
- 2) 長谷川雅美、白波瀬裕美：自己理解・対象理解を深めるプロセスレコード、8-17、日総研、2001
- 3) 西尾実、他：岩波国語辞典、第6版、241、岩波書店、2000
- 4) <http://shigotonochikara.jp/chikara/nol9-dousatsuryoku.htm> 2013/08/01
- 5) フロレンス・ナイチンゲール、湯槿ます、薄井坦子、小玉香津子他訳：看護覚え書、第7版、178、現代社、2011
- 6) 奈良知子、渡辺繭子、上野玲子、他：看護学生のコミュニケーション技術教育についてのリフレクション、秋田県看護協会研究会誌、32、2-7、2007
- 7) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書、2007
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html> 2014/01/04
- 8) 長家智子：看護基礎教育におけるコミュニケーション能力形成方法の研究-生活体験・集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点をあてて-、2001
<http://www.hues.kyushu-u.ac.jp/education/student/pdf/2001/2HE00088P.pdf> 2014/01/06
- 9) 酒井美子：コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える、群馬県立県民健康科学大学紀要、5、103-114、2010
- 10) 國眼真理子：いまどきの若者の考え方・育て方、第2版、54-59、日総研、2005
- 11) 平野馨：対人関係の基礎知識カウンセリングとグループ・ダイナミクスの活用、75、日本看護協会出版会、1993
- 12) 柿木隆介：人間は顔をどのように認識しているのか、総研大ジャーナル、16、28-33、2009
- 13) 高木幸子：コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割、早稲田大学大学院文学研究科紀要、51、25-36、2006
- 14) 吉川左紀子：4. 顔・表情認知研究の最前線、映像情報メディア学会誌、54 (9)、1245-1251、2000
- 15) 竹原卓真、野村理朗：「顔」研究の最前線、41、北大路書房、2004
- 16) ジョイス・トラベルビー、長谷川浩訳：対人関係に学ぶ看護、57、医学書院、2000
- 17) 竹原卓真、野村理朗：「顔」研究の最前線、188、北大路書房、2004
- 18) 光戸利奈、橋本優花里：表情認知のメカニズムとその生涯について、福山大学心の健康相談室紀要、4、83-88、2010